

資料室だより 137

坂由理先生の業績

グレゴリオの家で長年にわたりチェンバロ、通奏低音の指導をしてこられた坂先生はいくつかの論文も執筆しておられるので資料室としてはそれらの論文を抜き刷り、あるいは現物で保管しています。当資料室の論文目録をご覧になれば精力的なご活動が伺えます。先生はチェンバロ奏者ですが作曲科ご出身です。通奏低音には作曲家の能力がフル回転させられていることと思います。作曲家としての坂先生の作品は 1995 年、1996 年、1997 年、1998 年、2000 年にグレゴリオの家の催し「グレゴリオの秋」で演奏されてきました。これらも資料室で保管しておりますがこのたびここにご紹介するのは論文です。

「グレゴリオの家の研究論集 II」をはじめとして大学の研究紀要に発表された論文は皆さんの利用に供することができるようにしておりますので手に取ってお読みにすることができます。論文を執筆するのは音楽学者だけではありません。演奏と学究の両輪で活動されておられる方が身近にいることを知っていただきたいと思います。

先生にとっては書くことと弾くことは別のことではなく全く同じことだそうです。演奏の場合最終的に好みや感覚で決めることもありえますが原理的なことを知り、レッスンでちゃんと説明するためにも理論書や文献をひも解くことになる、そして感覚と理論を対立的にとらえるのではなく、理論が体の中に入ってきて感覚を変えていく、というふうに取り組んでおられます。

通奏低音だけではなく坂先生の大きなウェイトは「音律」の問題です。西洋音楽は数学と不可分の伝統がありますが音楽家は数字に弱いという偏見を破り音律の問題を歴史的に追いつけておられるのは貴重なことではないでしょうか？

チェンバロ奏者にとって音律は身近な大問題です。以下に資料室所蔵の坂先生の論文を挙げます。お読みにになりたい方は杉本までお声がけください。

- * L.ペーナ『音楽の曙』における通奏低音法（聖グレゴリオの家研究論集 II, 2006）
- * G.サバッティーニ『通奏低音のための平易で簡潔な規則』（東京音大付属民族音楽研究所紀要、2015）
- * G.M.アルトゥージ『対位法技法』（1598）における音程論（同上、2019）
- * アドリアン・ウィラールトのモテット[Qui non ebrietas]の音律をめぐって（同上 2020）
- * G.ザルリーノ『ハルモニア教程』（1558）第三部「対位法」における音律論（同上、2021）

（杉本ゆり記/一部は坂先生インタビューに基づく）